SKYMENU 活用授業 実践レポート

お名前	畔木 歩	学校名	安城市立安城南部小学校
実施学年	4年	教　科	道徳科
主題名 教材名	自分をかがやかせて 【A個性の伸長】 「みんなちがって、みんないい」（出典：「きみがいちばんひかるとき4」光村図書）		

≪学びを深めたいポイント≫

本教材は、金子みすゞさんの詩「わたしと小鳥とすずと」と、その詩を読んで感じた、違いを認め合うことの大切さを書いた児童作品を通して、自分を輝かせることについて考えさせる教材である。

本時は、持ち味を生かすことについて考える授業である。本時では、まず、初発の感想をもとにしたテキストマイニングの結果を提示し、児童と共に本時の問いを設定した。児童の思考の中から本時の問いを作ることで、本時のねらいをより自分事として考え、対話の意欲を高めることにつなげたいと考えたためである。

持ち味を生かすことについての本時のねらいが設定された後、中心発問で、「あなたは自分の持ち味をどのくらい生かせているか」と問い、自分の持ち味を生かすことについての意見を多面的に出させた。そして、児童のつぶやきを拾いながら、長所だけではなく、短所も持ち味であることに気付かせたり、出された意見に対し、「持ち味を生かすことができているのはなぜか」「持ち味を生かすことのよさは何か」「長所を生かすとはどのようなことか」などの補助発問をしたりしながら、持ち味を生かすことや、その価値を学級全員で練り上げた。持ち味を生かすことの価値に気付き、持ち味を生かしてみたいという思いが膨らんだところで、「あなたの持ち味は何だろう」と問うことで、少し離れて見つめていた「持ち味を生かす」という価値について、全員に自分事として考えさせた。そして、「自分の持ち味をどのように生かしていきたいか」と問うことで、どんな行動が自分を輝かせることにつながるかを考えさせた。

本実践では、道徳科の本質を大切にした ICT 活用をしていくことを目指した。

≪SKYMENU 活用のポイント≫

本時では、ポジショニングと気づきメモの機能を活用した。言語化できない繊細な心情を表出させたり、本音を引き出したりするためのツールとして活用し、児童それぞれが自分なりの納得解を得るための一助とした。

ポジショニング：コメント機能を活用し、じっくり考えさせた。「自分の気持ちはどのあたりだろうか」と考え、マーカを置く、「自分はどのように考えているだろうか」とコメントを書く、この2つの活動をじっくり行うことで、児童の自己内対話の時間とした。また、置かれたポジションや出された意見を揺さぶるためにも、じっくりと考えさせることは大切だと考える。本時では、中心発問で、「あなたは自分の持ち味をどのくらい生かせているか」と問い、自分の持ち味を生かすことについて意見を出させた後、出された意見を揺さぶったり、100%にならない部分に焦点をあてたりすることで、「持ち味を生かすこと」について深く考えさせた。そして、その後、「あなたの持ち味は何だろう」と問い、少し離れて見つめていた「持ち味を生かす」という価値を、自分事として考えさせた。

気づきメモ：本学級では、気付きメモを「チラシの裏」のように使っている。かしこまった雰囲気で使うのではなく、「入力する文字は短くて良い、誤字脱字があってもかまわない」ということをルールとして、普段の何気ないつぶやきを教師に届けるようなイメージでの活用を促している。そのことで、本音を気軽に表現できる空気をつくることができている。本実践では、まず、事前読みの感想を書く際に活用した。事前読みの感想書きを気づきメモ

で行うことで、教材に対し、心を開いた状態（みんなに自分の思いを表明するぞという気持ちをもった状態や、自分なりの感想を本音で書くことができる状態）で授業を始めることができた。また、本時では、「自分の持ち味は何か」と問う場面があった。自分の心に実直に向き合って考えさせたい場面であったため、ここでも気づきメモを活用した。自分の持ち味に自信をもてない児童や、自分に目を向けることができていない児童の中には、「わからない」と書く姿が見られた。そうした児童を意図的指名し、学級全員で気持ちを共有したことで、「こんな良いところがあるよ」と仲間の持ち味に目を向ける姿が見られた。

≪実践内容≫

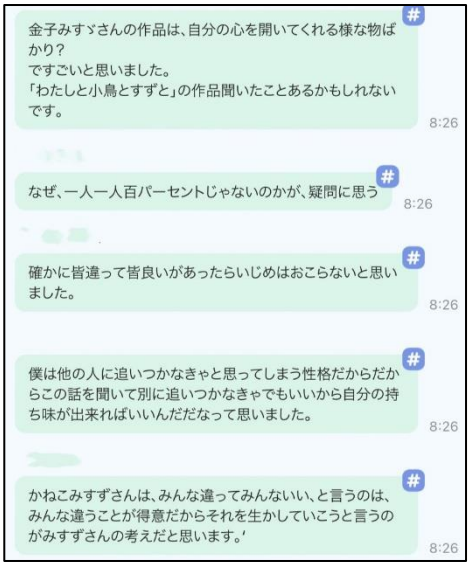
【本時のねらい】

詩「わたしと小鳥とすずと」と、その詩を読んで感じた、違いを認め合うことの大切さを書いた児童作品について話し合い、自分の持ち味を見つめることを通して、自分を輝かせ、自分の個性を伸ばしていこうとする実践意欲と態度を育てる。

	学習活動	SKYMENU 活用場面	活用のポイント
導入	1.初発の感想のテキストマイニングを見て、本時の問いを設定する。	・あらかじめ気付きメモに入力させた事前読みの感想をもとに、児童全員で本時の問いを作成する。【＊1】	・気づきメモを「チラシの裏」のように使い、本音を引き出すようにする。
展開	あなたは自分の持ち味をどのくらい生かせているか 2.自分の持ち味について考える。 (1)自分の持ち味をどれくらい生かせているのか考える。 (2)自分の持ち味は何かを考える。	・ポジショニング機能で、自分の立ち位置を数直線上にポジショニングし、コメントを入力する。【＊2】 ・気づきメモに入力させる。【＊3】	・コメント機能を使用し、1人でじっくり考えさせる時間を作ることで、自己内対話を促すようにする。 ・気づきメモを「チラシの裏」のように使い、本音を引き出すようにする。
まとめ	3.振り返りをする。		

【評価】

持ち味を生かすとはどういうことかについて考え、自分の持ち味やその生かし方について、自分自身との関わりの中で考えることができたか、話し合いの様子や振り返りの記述から見取る。



【＊1】

事前読みの感想を発表したい児童にどんどん発言させ、その中でさりげなく A さんを意図的指名した。「さりげなく」指名したのは、教員があからさまに意図的指名をすることで、児童に発言に「正解」「不正解」があるように受け止められることや、本音の会話が出なくなってしまうことを懸念したためである。A さんを意図的に指名したのは「ほかの人に追いつかなきゃと思ってしまう」「自分の持ち味ができればいい」という言葉が気づきメモの中にあったためだ。発言した後、「持ち味って一体何だろう」と全体に問いかけ、意見を交わしてから「持ち味を生かすとは？」という本時のめあてをみんなで設定した。

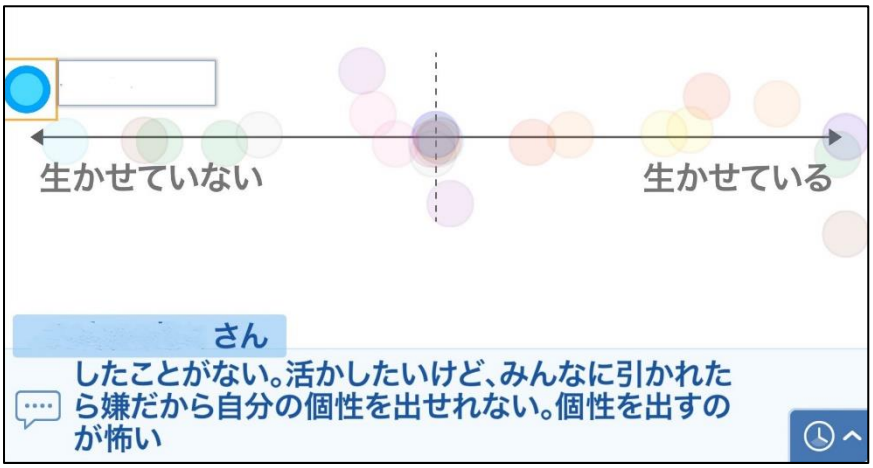
【＊2】

・「みんなは自分の『持ち味』をどれくらい生かせているだろうか」という問いを投げかけた。児童にはポジショニング機能でマーカを置き、コメントも入力してもらった。私は、ポジショニングは、コメント入力こそ重要だと考えている。児童が考えを言語化する過程で自己内対話が生まれ、そして、考えをもてたことで「発言したい」という意欲が高まるからである。そうすることで、道徳科の授業で望ましい好循環が生まれる。また、コメント入力のメリットはもう一つある。それは授業終了後も全員が考え続けられる、全員が参加できるという点である。コメントが残っていれば、授業が終わっても教員も児童もその内容を見て、友達に声をかけるきっかけをもてる。それは、授業時間に限らず学校生活全体を通じて道徳性を養う取り組みができる。私自身も、児童が悩みながら考えた回答を見ると、時間を問わず関わりたいと思うようになる。時間の制約を超える、道徳科の授業でポジショニングを活用する大きな利点である。

・ポジショニングの結果を児童に共有する際は、「結果が予想どおりか、意外だったか」を問う。そのことにより、児童は自分や他者の考えに意識を向け、その違いに気づいて、疑問や興味を抱くようになることをねらっている。

・「100%生かせている」でも「100%生かせていない」でもない、70%程度の位置に置かれたマーカに注目させ、「ここの意味は何だろう」と考える時間を設けた。児童からは、「生かせていないことがあって自信がない」や「毎日は生かせないから」といった意見が出された。これに対し、「持ち味は毎日生かせるものなのか。生かせない日もあるのか」とさらに問いを深めることができた。

　ポジショニングでは、100%にならない残りの部分について問うていくことにより、児童の考えを深めることができる。

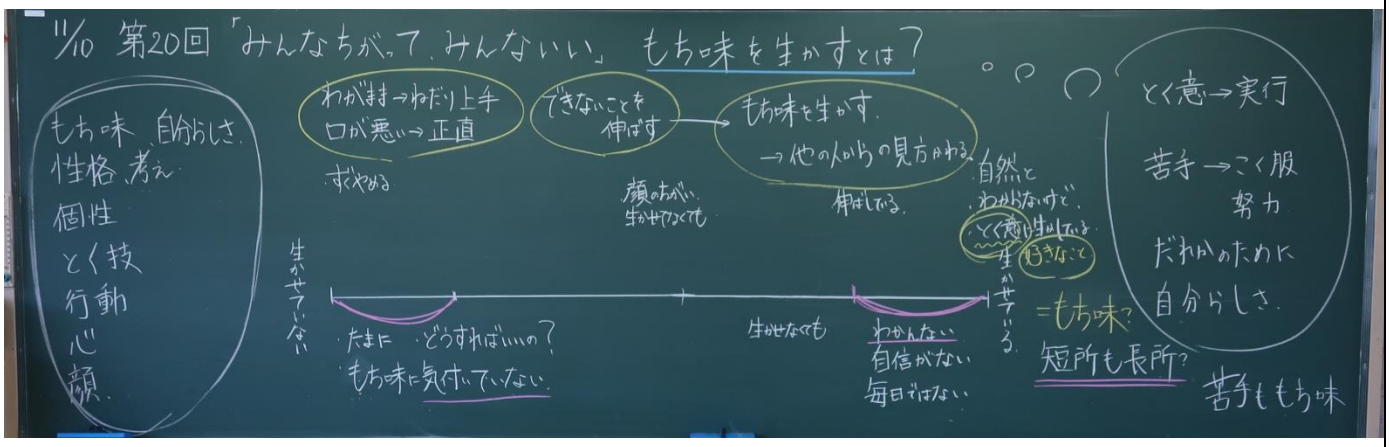


【＊3】

・「持ち味に気づいていないのではないか」「持ち味を生かすことは、得意なことを伸ばすことではないか」という意見が交わされた。これらの意見を受けて「では、あなたの持ち味は何か」と問いを投げかけ、その後、気づきメモに自分の持ち味を入力させた。この発問によって、これまでの遠い視点から見ていた持ち味が、一気に自分事となり、児童は自分と向き合って真剣に「持ち味」を考えはじめた。心のままに気づきメモに入力できる児童もいれば、キーボードを打つ手が止まる児童も見られた。大型テレビに気づきメモの画面を投影して、みんなでその内容を見ていると「分からない」とか「持ち味なんてない」といった本音をつぶやいている児童も見られた。

・気づきメモを見ていると、ある児童が「長所を言い換えれば短所になる」と発言し、「持ち味は見方によって価値が変わる」ことに気づいた。そこで「自分が気づいていない持ち味を、友達が教えてくれるかもしれない」と提案し、児童同士で「持ち味」を伝え合う時間を設定した。

≪実践を振り返って≫

本実践では、児童は表面的な回答に留まることなく、学習テーマに対し、本音で話したり、書いたりする場面が多く見られた。こうした状況が生まれたのも気づきメモで本音を共有したからだと思っている。事前読みの段階ですでに自分の心の内を気づきメモに入力しているため、友達と対話する準備が整っていたことも大きな要因である。自分の本音が教師や友達に受け取られたことで、心の重荷が取り除かれた。まるで栓が外れたように思いがあふれでてきて、本音で話せたのだと思う。

児童の振り返りを見ると「自分の持ち味を生かすことが、ほかの人の役に立つかもしれない」「得意なことを増やせば、苦手を克服できる」「持ち味に自分らしさがあればよい」といった感想をもっていた。中には、「自分らしさを出すことに躊躇していたが、今日の経験で少しずつでも自分らしさを出していきたい」と書いた児童もいた。この児童にとっては、この時間が自分の個性を認識して自信をもてる機会になったのではないかと思う。本時において、児童が学習テーマと向き合い、考えを深めるためにはポジショニングでの自己内対話や気づきメモで本音を出しあうことは不可欠だったと思う。これからも、道徳科の本質を大切にしながら、ICT 活用を進めていきたい。